



TITLE:

阿波の隆[起][海]岸

AUTHOR(S):

小牧, 實繁

CITATION:

小牧, 實繁. 阿波の隆[起][海]岸. 地球 1925, 4(1): 43-47

ISSUE DATE:

1925-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182972>

RIGHT:

阿波の隆起海岸

小 牧 實 繁

徳島市外加茂名^ナ町大字^{クラセト}藏本^{ミタニ}字三谷の徳島市水道濾過池工事場より丸木船が発見せられたとの新聞記事を六月六日の朝刊で見たので早速登校して小川教授に相談し實地踏査する事になった。同日午後十二時第二十八共同丸で神戸を出帆し翌日午前五時小松島に到着、七時過ぎには、阿波の考古學研究者で今回の丸木船の発見者たる徳島市富田古馬場の森敬介氏の客となつて居た。徳島市出身の那波文學士の紹介狀を差出し來意を告げると快く應ぜられ、徳島市附近出土の石器土器、文化六年二月の名東郡佐古村藏本村分間繪圖控なる古地圖を示され、詳細なる説明を與へられた。其れより案内せられて丸木船出土の現場を踏査し、眉山の綠泥片岩、紅簾片岩を採取した後、城山に於ける先史時代の遺跡へ案内せられ、城山の北端に於ける海蝕の跡を

阿波の隆起海岸

見、終日を有益なる實地踏査に費したのである。此の有益なる實地踏査の中で特に自分の興味を引いたのは城山北端に於ける海蝕の跡であつた。之れは阿波に於ける海岸の隆起を物語る確實なる證據であると思はれるからである。

城山は標高僅かに六〇米の一小丘であるから五萬分一地形圖上でも仔細に見なければ一寸氣づかない位であるが、之は層向東西、北に傾斜せる綠泥片岩の岩山で明かに眉山の連續である。

此の城山の北端、綠泥片岩の一角が助任川^{スゲト}へ突出して一露頭を形成する所に明かに海蝕の跡が認められるのである。寫眞にも見られる通り一寸穿孔貝の跡と思はれる様な小さな凸凹となつて現れて居る。而して此の海蝕痕は地面上より二〇尺の所までは明かに追究する事が出来る。自分が此の岩を訪れたのは六月七日の午後

五時頃で丁度陰曆閏四月十六日に當つて居た。

當時助任川で四手網を樂んで居た老漁師から大潮面の水準を確めたる後、其の水準面から地面に至る石垣の高さを測定した所が八尺であつた。此れが此の地點に於ける地面の大潮面上の高さである。水路誌に

よれば徳島の南方約二里許の小松島に於ては朔望高潮五時四十七分、大潮升四呎四三分であるが、此の地點の大潮升も略同様と見れば此の地點の中等潮位は大潮面より更に二呎八分三低い譯で此の地點の地面の高さは中等



線泥片岩に見る海蝕跡

前海蝕の及んだ點が現今の中等潮位上九米の水準面に存すると云へる。

此の海蝕痕のみを以てしても立派に海岸の隆起を立證し得るのであるが、尙其他にも一、二の證據を挙げ得る。其れは城山東麓に於ける洞窟

の存在である。此の洞

窟は、走向北八〇度東、

北へ四二度傾斜した綠

泥片岩の傾斜節理に沿

ひ西への奥行三三尺、

幅、入口にて約九尺、

西奥にて約三尺、高さ

約二〇尺のもので、鳥

居龍藏博士、森敬介氏

等が先住民族洞窟生活

の遺跡と考へ城山第三

號遺跡と命名せられるものである。森氏の談に

よれば該洞窟内貝層よりは下部よりアイヌ式土

器、上部より彌生式土器、石斧、石庖丁等を發

見したとの事で貝層の一部は今尙保存せられて

潮位上約十尺五寸の水準面にあり、海蝕の跡は同三十尺五寸即ち九・二米の水準面まで追究出来る。之れによつて見れば阿波の海岸は地質學的の最近に約二十八尺隆起し、其の以

居る。此の洞窟が先住民民族穴居の跡なりや否やは今論外として述べない、兎に角遺物が發見せられた以上は之れを遺跡と稱する事は承認するが、然し之れは人間が穿つたものではなく固より自然の洞窟である。即ち略東西の走向に沿ひ其の傾斜節理に沿ひ海蝕が加はつて穿たれた海蝕洞である。此れが人工のものでなく海蝕によるものなる事は其の北の側面をなす層面に明かに海蝕痕を認め得る事によつても明かである。

此の海蝕痕は自分の實見したる限りに於ては二十尺の高さの最上部までは認められなかつたが此れは其の部分にも嘗て海蝕痕を有して居たものが節理若しくは層面に沿ふ一部岩石の崩落でなくなつたものと解すべきである。而して此の洞窟の高さが、上述城山北端の海蝕痕を有する岩石直下の地面と略同水準面から約二十尺の高さを有する事は、前述の海蝕痕が地面上二十尺の水準面まで明かに追求せられる事實と併せ考へ殊に興味ある點で、之れは明かに海水の浸蝕作用によつて形成せられた海蝕洞と斷する事が

出来る。其れが地盤の隆起と共に海水の達しない所となり、先史時代に於て住民の利用する所となつたので、其れが原始民族の住居となつたか、或は墳墓として利用せられたか、それは考古學上興味ある問題であるが今日自分の論すべき所ではない。然しかゝる考古學上の興味から離れて考へて見ても此の洞窟は海蝕を受けたる海岸隆起の證として誠に興味あるものである。

海岸の隆起は以上二つの事實で立派に立證せられるのであるが、尙他の證據をも舉げる事が出来る。其れは吉野川下流地方に於て略十米の同高線を境として結晶片岩の山地と沖積地の阿波平野との區劃を明確に決定する事が出来、兩者が氣持のよい地形の對照を構成して居る事で之れは眉山や城山に登つて阿波平野を俯瞰する事によつても、又二萬分一徳島近傍の地形圖に十米の等高線を辿つて見ても直ちに理解出来る事であるが、此の事實が嘗て現今の海面上十米の近くまで海水に被はれて居た地盤が其の後十米許隆起して海岸殊に吉野川の海に朝する附近

に廣大なる沖積平野が發達した事の一證を供して居るのである。

此の海岸の隆起と關聯して興味あるのは今回の丸木舟の發見である。發見地點は徳島市の西郊加茂名町大字藏本字三谷の一地點で、最近までは田圃であつた所であるが、水道濫過池建設のため約十尺許掘下げたので、其の地層の層序を知る事が出来る。其の層序は田圃面より下約二尺は淡褐色を帯びたる砂質泥土、其の下部約四尺は稍黒味を帯びたる粘土質泥土、更に其の下部は青灰色を帯びたる均質の砂層である。敷地の略中央東端、前述四尺の厚さを有する稍黒色粘土質泥土の層中下部に當り、著しく腐植土を混じた地層の露頭があり、該地點の北、敷地の東北隅に當りて略同水準面に同様腐植土を混じた地層の露頭があり共に該粘土質泥土より漸次に推移して居る。此の腐植土層は、其の中より菱の實、藍鐵鏽等を發見する事實より沼澤性のものである事一見明かであるが、此の層中よりは丸太の腐朽せるものも發見せられ、又興味ある事

には森氏及び余は表面より約六尺青灰砂層面上約八寸許の層中より彌生式土器破片及び木炭の一片を發掘し、該木炭の一片は單なる沼澤中の炭化物でなく燃燒によつたものである事は横山助教授によつて確められた。丸木舟は上述の如き地層の最下層、即ち青灰色均質砂層より發見せられたのであつて、其の表面は中央部に於て表土面上より六尺を降れる該砂層表面下約一尺に位して居る。尙詳しく其の位置を述べれば、敷地面の略中央に舳部を東に艫部を西にして横はり舳部に緩傾斜をなして居る。全長約三八・七尺、幅中央部に於て四尺、前後部に稍狭まり、上部は一體に扁平で多少の挟りあり中央部に於ては約一・四尺の深さに抉つて居る。

未だ部分的に發掘せられたに止り全體を窺ふ事を得ないので今に於て直ちに之れが丸木舟であると斷言する事は出来ず、近日鳥居博士が實地踏査せられると云ふから、其の研究の結果を待つより外ないのであるが、之れが若し果して丸木舟であるとすれば之れが發見地點は該

丸木舟の使用せられた時代の淺海底若しくは河口底であつたらうと思はれる。此れは該遺物發見地の地層を形成する均質の砂よりも想像せられる事である。該砂層が青灰色を帯びて居るのは後其の上に堆積した黑色粘土質泥土のために色づけられたものと解すべきである。

該地點の標高は二萬分の一地形圖德島圖幅によれば海面上五米、丸木舟の表面は地下約七尺、其の厚さは今尙不明であるが、之れを假りに二尺とすれば丸木舟の底面は地下約九尺即約三米弱であるから該丸木舟は海面上約二米強の水準面に横はる譯である。丸木舟の底面が當時の海底面であるか河底面であるかは不明であるが恐らく海底面とすべきであらう、然し海底面であるとしても其の地層が砂質である點より考へ何

エミール・アルガン氏の亞細亞構造論

小 川 琢 治

一九二二年八月白國ブルツセル府開催の第十

三回萬國地質學會議は一九一七年に催さるべき

れ淺海底であつたらうから便宜之れが海水面を代表するとして、若し之の遺物が丸木舟であるとすれば、該丸木舟の使用せられた時代以來、地盤が約二米許隆起した事實を認めなければならぬ。即ち城山北端の岩石の露頭が現今の海面上約九米迄海蝕を被つた時代以後陸地は引續き隆起し、約七米隆起した時代に此の丸木舟が使用せられ、其の後も尙隆起は繼續し現今に至るまでに更に約二米隆起したものと考へられる。

以上は研究の一端と云はんよりも寧ろ豫察で今後尙研究を進めなければならぬ點が多々あるが今は此の程度の事しか云へない。擲筆するに當り終日遺跡案内の勞をとられ幾多の助言を賜りたる森敬介氏の厚意に對し深甚の謝意を表する。(一九二五・六・一一)